

津屋崎千軒新聞

¥0 創刊号 春

平成十九年三月

発行 津屋崎千軒 海とまちなみの会
事務局連絡先 〒811-3304 福津市津屋崎369-14
会長 吉村勝利
E-mail:yosi3019@sage.ocn.ne.jp

今回の総力特集(町歩き取材をしました)
・幻の逸品
・ひと
・お邪魔します、粋な店。
・津屋崎のへえ
・お知らせ、他
○懐かしい馬鉄の思い出

津屋崎千軒ってなんなの？

黒田藩により博多を軍港、津屋崎を交易港に

関が原の戦い(一六〇〇年)の恩賞により一六〇二年、黒田長政公が筑前の領主となり博多に入り国づくりに力を注いだ。黒田藩は博多を中心とした港は軍港とし、津屋崎は交易港とした。そのうなる自然に豪商が出現。長政公の家来であった佐治家が刀を捨てて酒づくりを始め、寛保三年(一七四三年)大社元七(おおぞもとち)氏が従業者五百人にも及ぶ大規模な塩田による塩作りを始め、廻船問屋の吉原家なども加わった。港では五十集船(いさばぶね)が塩を主に積荷とし、海産物や、鞍手・宗像方面から集められた農産物などを博多に運び、日用品、衣類、薬、金物荒物、たばこ等が津屋崎に陸揚げされ、筑前最大の浦として入船出船で大変賑わった。津屋崎千軒(遠賀郡芦屋町)と、関千軒(山口県下関市)と共に海上交易の拠点であった。正確には明治の始め、津屋崎浦三三三戸、津屋崎村三〇〇戸の合計六四三戸と、当時としては大集落の意をなして津屋崎千軒と呼ばれたのである。(大正六年の筑豊沿海誌によると、戸数一六〇を有し、宗像郡内第一の大邑である」と表記。)その後、明治二三年九州鉄道が開通し海上交通は徐々に衰退した。明治四四年から四五五年にかけ

津屋崎は昔、深く入りこんだ大きな入江を有し、製塩に適しているとして室町時代から宗像大社に納めるための製塩が社に納められたが、本格的に塩田開発が行われ始めたのは、寛保元年(一七四一年)のことである。黒田藩の時代、四国の讃岐から商用で津屋崎を訪れていた大社基七さんが塩づくりに適した土地だと思われ、塩造りの大切さを黒田藩に訴えて、責任者に任命されたのがそのきっかけである。開発はあまりに大規模だったので黒田公に願ひ出て応援を頼み、塩造りは大社家、販売は福田家と役割分担を行うこととしたのである。当時、急ピッチで開発が

博多を支えた九州一の塩田

大社元七氏により塩田拡大

津屋崎は昔、深く入りこんだ大きな入江を有し、製塩に適しているとして室町時代から宗像大社に納めるための製塩が社に納められたが、本格的に塩田開発が行われ始めたのは、寛保元年(一七四一年)のことである。黒田藩の時代、四国の讃岐から商用で津屋崎を訪れていた大社基七さんが塩づくりに適した土地だと思われ、塩造りの大切さを黒田藩に訴えて、責任者に任命されたのがそのきっかけである。開発はあまりに大規模だったので黒田公に願ひ出て応援を頼み、塩造りは大社家、販売は福田家と役割分担を行うこととしたのである。当時、急ピッチで開発が

幻の逸品

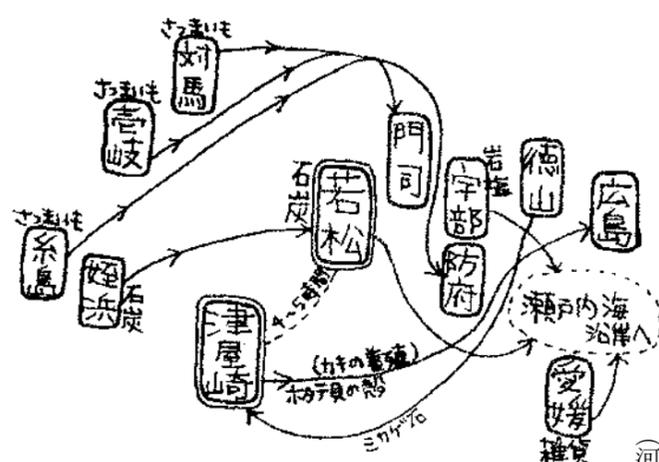
旧津屋崎町渡半島、大峰山頂にある、東郷神社。その社務所で祭神東郷平八郎元帥ゆかりのビール「写真II」が売られています。日本海海戦で強国ロシアのバルチック艦隊を全滅させた東郷元帥の偉業はロシアの属国であったフィンランドの民族意識をも高揚させ、ついに独立を果たしました。それを記念に一九七一年、フィンランドでは東郷元帥の肖像をラベルにした東郷ビールが登場しました。



そのビールが「津屋崎の東郷神社でも販売されています。オランダでの製造を経て、昨年から日本で製造され始めました。スリムな緑色の瓶で一度は味わいたいお酒落な「ライベイトビール」です。是非ご賞味あれ。(谷川)

五十集船の思い出

五十集船(いさばぶね)の、五十集とは、色々な物を沢山という意味で沢山乗せる事ができる船という事です。津屋崎にもかつて五十集船があり、夏から秋にかけて石炭採掘の盛んな若松(津屋崎から四〜五時間)を中心とした活動。冬場は玄界灘が荒れるため、瀬戸内海での活動でした。明社丸(みよしやま)に乗船されていた大浜秀吉さんは、当時、毎日早起き、天気風を読み、船を出されてたそうです。航海中にエンジンが動かなくなり、遭難してしまった事も。津屋崎山笠の前に数ヶ月に渡る航海から帰り、お盆が過ぎる頃まで休息をとりました。この間は青年宿となり、船の上で鶏飯などを作ったり、山笠を担ぎに行ったりして楽しく過ごしたそうです。昭和三十五年位に、関門海峡の完成などにより、陸路が整備されるにつれ、五十集船は次第に姿を消していききました。(河野)



五十集船明社丸の主な航路。(大浜秀吉さんより聞き書きしたもの)

土人形 原田誠さん

“土人形”と掲げた看板が目に入る。うなぎの寝床をした店の中で、素朴な形をした人形たちが迎えてくれた。土人形は原田誠さんが営む筑前津屋崎人形の工房だ。六〇センチを越える武者人形から親指サイズのめんこまで大小様々なものがある。もとは玩具として作られ始め、昔は軍人や野球人形などで世相を反映してきた。現在は干支やひな人形など人気が季節の行事を彩る。



安永年間(一七七七年頃)から今でもその手法はほとんど変わらない。粘土を手押しで型に詰め、素焼きした生地に彩色。その由来は近くに産出する良質な陶土を利用し人形や動物を造ったのが始まりとされている。工房の奥を案内してもらった千個あまりの型が並ぶのを待っていた。(湯浅)

お邪魔します、粋な店

上田製菓

今回のお店は昔懐かしいお菓子を製造・販売されている上田製菓にお邪魔しました。ペリー来航の翌年に創業以来、現在7代目のご主人上田弘美さんにお話を伺いました。昔は大勢の奉公人さんがいたそうで、当時を偲ぶ写真や法被など大切に飾ってありました。素材で昔のままの美味しさに東京からの注文もロコミであるそうです。我々が独断で選んだお薦め!



お知らせ

◆旧い旅館での現代美術展
「第二回津屋崎現代美術展」旧玉乃井旅館(解体と再生)プロジェクト
期間：四月二日(土)〜五月六日(日) 一時〜一時八時まで(土日祝)

津屋崎のへえ

馬車鉄道の津屋崎軌道は、明治四十年(今から約百年前)に設立された。国鉄福岡駅から宮地嶽神社停留所を経て、津屋崎天神橋の少し東側に津屋崎駅があった。延長三、八キロの小鉄道で、線路の幅は九一、四センチ一頭立の馬車で、定員十六名の客車を引き、時速約八キロ、津屋崎―福岡の間を約二五分で結んでいた。宮地嶽駅の駅員をしていた津崎米夫さん(八二歳)のお話では、馬車は十台あり、津屋崎には、馬つなぎの松が六本あった。最盛期には、年間約十八万人の観光客を宮地嶽神社に運んでいたそう。乗客が多いときには、二台を連れて行くこともあり、福岡から宮司まで十二分、宮司から津屋崎までを十三分で行き、時刻表はすべて手書きだった。うどん一杯が五銭、豆腐二丁が十銭の頃、馬鉄の運賃は、宮地嶽―福岡間の片道が十三銭、往復二十銭

馬鉄が走っていたのです

銀バスに客を奪われた馬車鉄道は、津屋崎―宮地嶽間で昭和八年頃に廃止になり、昭和十四年三月、宮地嶽―福岡間も廃止となった。(土戸)



津崎米夫さんが撮影